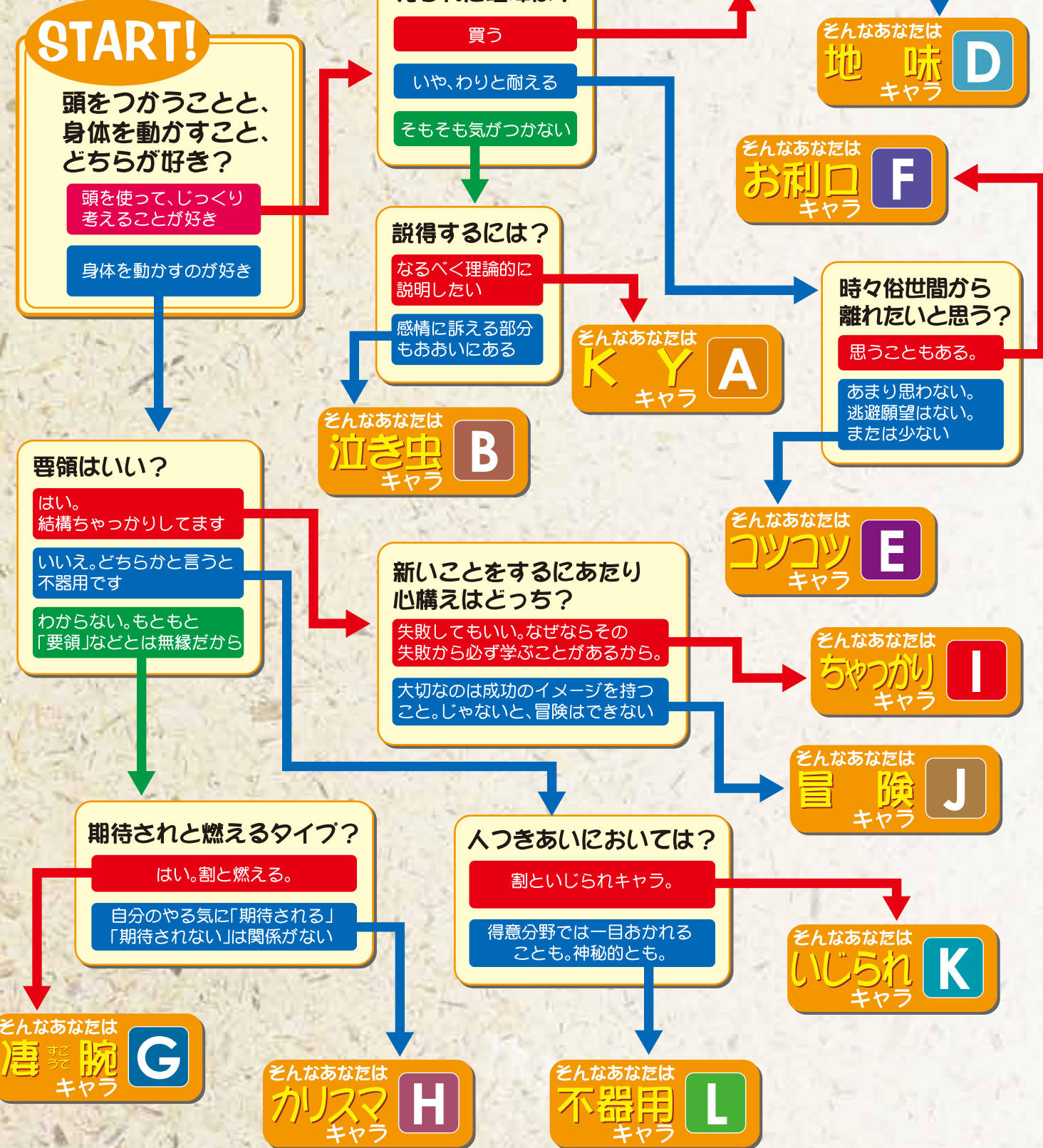


# 特別編集 あなたはどんなキャラ? 佐賀12賢人判定

個性も違えば、持ち味も違う。彼らが残した様々なエピソードから人物像を探ってみよう。自分にぴったりのキャラが見つかったら「誰この人？」なんてもう言わせない(笑)


あなたのことを教えてね!!



**A** 怒るのは二日たってから!?  
**江藤新平**  
弘道館にいた頃、悪友に何かいざさらされても気がつかない。ひどいことをされると2日程経ってから怒ったなど逸話が。明治国家の法律の仕組みをほぼ一人で構築した明晰で精緻な論理性が持ち味。議論は無敵だった。



**B** 泣き虫、世にはばかる  
**佐野常民**  
常人より情がもろく、よく泣いた。田中からくり儀右衛門が佐賀に来てくれたのも涙を流して懇願したから。傷ついた敵を看病するのは当然と、日本赤十字社を創設。これでは喧嘩しようにも気がそがれる(笑)。



**C** 型破りの勇気で国を導く  
**相良知安**  
並みいる明治新政府の重鎮の前で現場の責任者として堂々と反対意見を述べた。結果、明治の日本医学は、イギリス医学を手本にすることがほぼ決まっていたのだが、ドイツ医学に大転換できた。その舌鋒の鋭さと喧嘩腰を殿様がたしなめたことも。



**D** 明治新国家の「良識」  
**大木喬任**  
若い頃は弘道館指折りの武闘派だったが、教育と良質の仲間と恵まれ思慮深い人格へと陶冶された。人を大切に思ふの深さを秘めつつ、教育制度確立に向けて黙々と実務を執った。クールで実践力抜群の啓蒙家。



**E** 幕末明治屈指の名君主  
**鍋島直正**  
17歳の春、藩主に就任して佐賀へ赴く時に江戸・品川で大名行列が借金取りに足止めを食らった。この時の屈辱をバネに、困難な藩政改革・経世済民に生涯を捧げた「くじけない男」。幕末・明治の日本屈指の名君主。



**F** 政府の重職から書の道に  
**副島種臣**  
博覧強記。特に古事に明るく、明治の国家そのものの仕組みの方向性を定めた。外務卿など政府の重職を歴任するが明治6年の政変で下野。多くの同輩・後輩達から復帰を渴望されたが、清(中国)に外遊。書の世界に傾倒した。



**G** 戦国一の曲者(くせもの)  
**成富兵庫茂安**  
わずか11歳で戦場に赴いてからは、類まれな武勇で名を轟かせた。平和な世になると今度は人心を惹きつける治世家として凄腕を見せた。主君や周囲から、ここ一番に頼りになり、必ず結果を出す男として重宝がられた「戦国一の曲者(くせもの)」。



**H** 義祭同盟のカリスマリーダー  
**枝吉神陽**  
豪放磊落で、精神が強く、頭の出来はズバ抜けていい。義祭同盟の提唱者で志士たちの師匠的存在だったが、頭でっかちではなく、富士山を下駄履きで登ったといわれる「体育会系」。直正に「蘭学」を勧められたが突っぱねた信念の男。



**I** 愛すべき「ちゃっかり」精神  
**大隈重信**  
明治・大正きっての傑物。気宇が大きく、清濁併せ飲む人間の魅力を湛える。午前は断酒会で酒の害を説き、午後には酒造組合で「酒は百薬の長」と演説をぶったなど楽しい逸話が多い。大ホウ吹きでなかったことは数多くの偉業が証明してる。




**J** 気力と体力と勇気の人  
**徐福**  
一説によると、秦の始皇帝を手玉にとって、新しい国の王になるために日本に渡ってきたとも。真偽はともかく、並はずれた勇気と冒険心、気力と体力の持ち主でなかったら、3000人のリーダーとして海外移住を成功に導けないであろう。



**K** 情熱たぎる「ぬけた」人  
**島義勇**  
幼い明治天皇に手加減せず腕相撲で負かしたり、身を心配するあまり走って近寄り、建物に激突して血だらけになっても気づかなかつたり。佐賀の役を押しする役目なのに、佐賀人の悪口を聞いて大喧嘩して逆に佐賀側に立つなど、愉快な逸話が多い。



**L** 不器用転じて尊敬されて  
**売茶翁**  
お茶のお店を構えたが宣伝文句が難解すぎて、庶民がめったに立ち寄りなかった。仕方ないので、お茶道具を持って行楽地を巡回したが、その奇抜さが受けて京都の有名になり風流人から慕われた。何か途方もなく「深い」人と思われていた。



自分の勉強や仕事分野からも、守り神にピッタリの賢人が見つかるよ。

次のページから各賢人の紹介が始まるよ。それぞれの賢人イラストの隣には賢人の学問・専攻分野が記されているから、気になるジャンルが見つかったら、賢人バッジ(P33)などをお守り代わりにゲットしても!

※本文中に出て来る日付は、日本で新暦が導入される1872年(明治5年)12月以前のは旧暦のものとなっています。また、年齢は当時の慣習に従い、数え歳(生まれた年を1歳とし、以降元旦を迎えるごとに1歳ずつ加わる)での表記としています。